

毎年、復活節第4主日は、特祷にもあるように、よき羊飼いの日曜日ということで、羊飼いと羊との間の深いつながりについて学びます。特に羊飼いが、自分の命をかけて、自分の羊たちを守る、という絆の太さを、読まれる聖書の箇所学ぶことになっています。そして、羊飼いという言葉から派生して、牧師という言葉が生まれたのではないかと、と思いますが、将来牧師になるために勉強している神学生たちのいる神学校のために、祈り、献金をささげる伝統ができてきました。

そのことは、いいことだと思いますが、今日の福音書は、少し違ったことがテーマになっているのではないかと、思いました。3年サイクルのA年は、ヨハネの10章の最初、「羊の囲い」のたとえから始まって、私は羊の門である。ということが話の中心でした。そしてB年は、「わたしは良い羊飼いである。」という言葉が2回出てきて、まさに「良い羊飼いの日曜日」にふさわしい福音書なのですが、今日の福音書では、一連の羊飼いと羊の話から、テーマがかわって、22節からの部分には、別の小見出し「ユダヤ人、イエスを拒絶する。」というタイトルがついているのです。もちろん中には、羊の話も出てきますが、最初と最後に、とても印象深い言葉が出てきましたので、その話をしたいと思います。

今日の最初の節「そのころ、エルサレムで神殿奉献記念祭が行われた。冬であった。」と書かれています。これは、毎年、ユダヤ暦キスレブの月25日から8日間祝われる祭りです。彼らは宗教的な儀式については、月の満ち欠けで月を数えるので、だいたい私たちの暦の12月頃にあたります。そして今年、12月14日から、21日までお祝いをする事になっています。だいたい一年で昼の長さが一番短い季節にこれを祝うこととなります。今年の冬至は12月22日ですね。この時、ユダヤ人の家では、8本のローソクを立てる特別の燭台を出して、毎日1本ずつ増やしてゆく伝統があるんです。普段ユダヤ教で見られるローソク立ては、7本の枝が出ているものなのですが、1本多いんです。この、神殿奉献記念祭はハヌカーの祭りと言って、「ささげる」という意味のヘブライ語「ハヌク」からきているようです。

この祭り、神殿奉献記念祭について説明します。イエス様が生まれる170年くらい前、イスラエルの北側のシリアという国に、アンティオコス・エピファネスという王様がいました。この国は、アレキサンダー大王の4人の家来たちが、帝国を4つに分けた中の一つで、「ギリシャの文化とかギリシャの神様をあがめるように」と、植民地であるユダヤつまり、イスラエルの人々にも要求していました。エルサレムの神聖な神殿に、ギリシャの神ゼウスの像が持ち込まれ、神殿の大切な器などが略奪され、メスの豚が供えられる、という、ユダヤ人にはとても耐えられない、屈辱的な出来事がありました。このことに怒ったのが、ユダ・マカベアという人物とその兄弟たちで、紀元前165年に独立を勝ち取り、ローマ帝国に支配されるまでの約100年間、独立国だったことがあるのです。このことについては、旧約聖書続編の「マカバイ記」に詳しく書かれています。関心のある人は読んでみてください。

これから後は、それには出てこない、伝説の話ですが、汚された神殿が、清められた時、神殿の中に供えられた七つの枝の蠟燭台に、また火をともしことになったのだけれど、大祭司が清めた純粋な油は、小瓶に一つだけでした。どう考えても、たった1日しかもたないと思われました。

ところが神様が、8日間燃え続けさせてくださったので、この神殿が清められたお祝いには、普段とは違う、8本の枝のあるローソク立てをつかって、毎日一本ずつ増やして行くことになった、というわけです。そして、このお祭りは、一年で一番暗い頃、冬至の頃に、祝われるもので、イエス様と同じ時代に生きたユダヤ人の歴史家ヨセフスという人は、この神殿奉献記念祭、ハヌカの祭りを「光の祭り」と呼ぶようになり、現在に至っています。

このような冬至の頃に、イエス様がエルサレムの神殿の祭りに参加されていた、ということは、大変意味があることだ、とヨハネによる福音書の注解を書いた人が説明していました。後の時代の方が勝手にこじつけて言うことですが、この日は、イエス様の誕生日のあたりですし、直前の8章と9章で、イエス様はエルサレムにおられるのですが、光の祭りの時期に、2回「わたしは世の光である。」というのを言われているんですね。9章の方は、生まれつき目の見えない人を治す時に、言われているのですが、8章のところでは、やはり神殿にいて、ファリサイ派の人々と論争された時に、言われました。その論争の最後に「あなたたちは、わたしもわたしの父も知らない。もし、わたしを知っていたら、わたしの父をも知るはずだ。」と言われます。そして、福音記者は、「イエスは神殿の境内で教えておられたとき、宝物殿の近くでこれらのことを話された。」と付け加えています。

イエス様が生まれる160年ほど前に、ユダヤ人を解放して、神殿を取り戻した出来事があった、その記念の「光の祭り」に、取り戻した宝物が置かれている建物の近くにイエス様が登場して、「わたしは世の光である。」と言われたことは、この福音書の大変重要なところだろうと思われま

す。このヨハネによる福音書の最初では、イエス様のことは、「言」とか「命」とか「光」として紹介されています。

1章4節5節「言のうちに命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。」と書かれています。

そして、少しあとで、11節12節「言は自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。」と説明します。

そしてこのヨハネ福音書の一応の終わりである20章31節では、この福音書の書かれた目的が記されて「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」と結論が出ています。

そんな最初と最後の、ちょうどこの中間あたりに位置している、今日の福音書10章で、イエス様が、ユダヤ人たちから「もしお前がメシアなら、はっきりそう言いなさい。」と迫られます。それに対して「私はそれを言ったけど、あなたたちは信じない。信じる者がわたしの羊であり、従って来る者には、永遠の命を与えるのだ。」と言われました。

イエス様に、素直に質問して来る人もいたでしょうが、大半は、イエス様を毘にかけて、神様を冒瀆する宗教的罪か、ローマ帝国に反乱を起こそうとする、政治犯として処罰してやろうと、訴える口実を見つけるために来た人々だったのです。

そして、このあと決定的な「わたしと父とは一つである。」という、自分を神様と同格に置いた発言をされて、その後ラザロが生き返ったことから、一気に十字架への道を歩むことになるわけです。

これは、この福音書の最初に「言は神であった。」という説明。そして、復活のイエス様に向かって、トマスの口から「わたしの主、わたしの神よ」と証言させたのを結ぶところです。イエス様に出会ったユダヤ人たちにとって、イエス様の発言や行動は、理解できないものだったことでしょう。そして、世の中を混乱させるものに思えたのだらうと思います。

ユダヤ人たちが信じていた、旧約の神様は、多くの民族の中から、イスラエルを選び、彼らを特別扱いしてくれる存在でした。「天地を創造して、イスラエルをエジプトから救い出した唯一の神」というかたちで、神様はご自身を表されたのです。そして、モーセや多くの預言者たちは、この神様に忠実に歩もうと、努力してきた人々でした。

しかし、この人たちには、欠けた、足りないところがありました。それは、神様という方は、偉大な正義の神様。天に居て、人間の様子を眺めている存在としてしか理解できていなかった。確かに、旧約聖書という、まあ言わば、第一幕での神様の演技はそうだったろうけど、新約聖書という第二幕、第三幕で、神様は形を変えて、人間イエスとして、また聖霊なる神様として、ご自身を今まで以上にいろんな方法で示された、ということです。

そして、それは、神様が正義の神様だけではなく、愛する者のために自分の命を捨てることのできる、愛の神様である、ということです。これが、十字架にも結びつくのですが、愛というのは、相手がいて成立するもので、そこには、深い交わりがあります。イエス様と神様は、あくまでも別の人格を持っているのですが、両者の間には、深い愛というか信頼関係があります。そして、その交わりに、私たちが加えられていて、決して孤独ではない、ということが福音のメッセージなのです。

イエス様は、逮捕される前の晩に、17章のところで、ご自分に従った弟子たちが、一つになるように祈り、また後半では、「また、彼らのためだけでなく、彼らの言葉によってわたしを信じる人々のためにも、お願いします。父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。そうすれば、世は、あなたがわたしをお遣わしになったことを、信じるようになります。」とも言われました。

父と子と聖霊が、大変親しい交わりの中にあり、その交わりの中に、私たちが完全に入れられていくこと、これが私たちの歩むべき道であり、この礼拝の目的なんだということを、今日の福音書から、推し量っていただきたいと思います。

イエス様と神様は親しい交わりにあるが、それだけでは私と何の関係もありません。私たちが父と子と聖霊の交わりの中に、聖書のみ言葉を通し、また聖餐を通して加えられていることを確信することが、私たちの信仰の根本なのです。

この信仰を持てた時、私たちは多くの苦難をも乗り越える力が与えられるのです。

